



生源寺眞一 著

『農業がわかると、
社会のしくみが見えてくる』

「農業問題」とは、実に様々な要素を含む複雑な問題である。それは、国民の(質的・量的な)食料安全保障と密接な関連を有する。また、産業政策の観点からは、農業の競争力をいかに高めるかという議論も必要であり、そのことは国際的な貿易体制の問題、さらには途上国の飢餓の問題などとも関連していく。また、農業という産業が地域における主要な産業であり、農村の共同的な営みとも結びついたものであることから、地域社会の維持という観点からの議論も欠かせない。環境政策の観点からは、農業の有する様々な「外部経済」(また時には外部不経済)効果という問題も議論されなければならない。

こうした複雑な問題を丹念に検討することは極めて根気のいる作業である。現在の社会においては、ややもすると、こうした面倒な議論を好まず、単純明快な主張に人気集中するといった風潮も見られ、最近の農業関係の書籍にも、少なからずそうした傾向が見られる。しかし、本書は、複雑な農業問題の様々な側面を切り捨てることなく正面から取り上げ、さらに、一方的な見方に偏ることなく、異なる見方も存在することを丁寧にたどっていく。その語り口は平易であるが(本書の副題は「高校生からの食と農の経済学入門」である)、語られる内容は極めて意味深い。

農業問題に限らず、現実の社会におけ

る問題は、多かれ少なかれ複雑な諸側面を有しているものであろう。そうした社会的問題を一刀両断するような解決策は本来ありえない。本書のアプローチは、様々な社会的問題を考える際にあるべき誠実な姿勢を示すものであり、そうした意味において、まさに「社会のしくみが見えてくる」ものといえよう。

本書の構成は、「五限」(授業形式である)からなっている。一限目では、現代の世界の「食料問題」とはいったいどのようなものであるかが俯瞰される。二限目では、そうした世界の食料問題が歴史的にどのように形成されてきたかが、先進国、途上国それぞれの立場から述べられている。三限目からはそうした歴史的、世界的な食料問題の中で、わが国がどのような状況にあるかの講義に移っていく。三限目では、わが国の食料自給率、食料安全保障の問題が、四限目ではわが国農業の構造的な問題が様々な角度から論じられる。最後の授業である五限目では、これまでの議論を踏まえ、「食料は安価な外国産に任せて本当によいのか?」という問いかけがなされる。

著者自身があとがきで触れているように、この本には、農業政策はこうあるべきだ、といった「解答」のようなものは述べられていない。しかし、そこには、著者自身のもつ、農業・農村への愛情とともに、政策を立案する際に必要不可欠な、幅広く、公正な視点という立場が貫かれている。本書の意図した「若者」だけでなく、できるだけ多くの国民に読んでもらいたい一冊である。

—家の光協会 2010年10月

1,200円(税別) 205頁—

(代表取締役社長 佐藤純二・さとうじゅんじ)